

## 伝え残したい風景—里山とため池

先ごろ行われた「たかまつ美しいまちづくりシンポジウム」で基調講演をしていただいた、早稲田大学 佐々木葉教授が、「高松の中で一番好きなのは、本当にこのかわいらしい形の山とため池ですね。」と話されていました。讃岐平野の里山とため池。地元に住んでいる私たちは、その良さを失念しがちですが、外から来た人から見れば、その風景は非常に魅力的なものに映るようです。

讃岐平野には、特徴的な形をした里山が数多く見られます。よくおむすび山と称されるのは、ビュート地形と言われるものです。その丸みを帯びた三角形の山は、姿形がかわいらしく、見ているだけで癒される雰囲気醸し出すようです。「まんが日本昔ばなし」に出てくるような、と形容されることもあります。それはある意味当然のこと。あの絵を描いているのは、高松市出身の画家、池原昭治さんなのであります。

また、昔から水不足に悩まされてきた讃岐平野は、雨水を利活用するため、多くのため池が造られてきました。県内のため池の数は、小さなものも含めれば1万5,000弱、高松市内では約2,700か所にも上ります。全国一の密度を有するため池は、貴重な親水空間として、私たちの暮らしに潤いをもたらしてくれます。

里山もため池も、単に自然としてそこにあるわけではありません。里山は、地域の人々の手入れにより生物多様性などが保たれ、豊かな緑として残されてきたものですし、ため池は、人間の必要に応じて築かれ、活用されてきたものです。里山とため池は、地域の人々の<sup>なりわい</sup>生業と結びついた讃岐の独特な風景として、今日に至っているのです。高松市では、このような里山やため池を守り育てる担い手を確保し、後世に引き継いでいこうと「いざ里山市民活動支援事業」や「ため池守り隊市民活動支援事業」を展開しています。

春もすぐそこまで来ています。柔らかな日差しを浴びて光り輝く里山とため池ののどかな様子は、他のどこにもない讃岐の誇るべき文化的景観です。私たちの責務として、これらの価値を再認識し、良好な形で伝え残していく必要があるものと考えています。